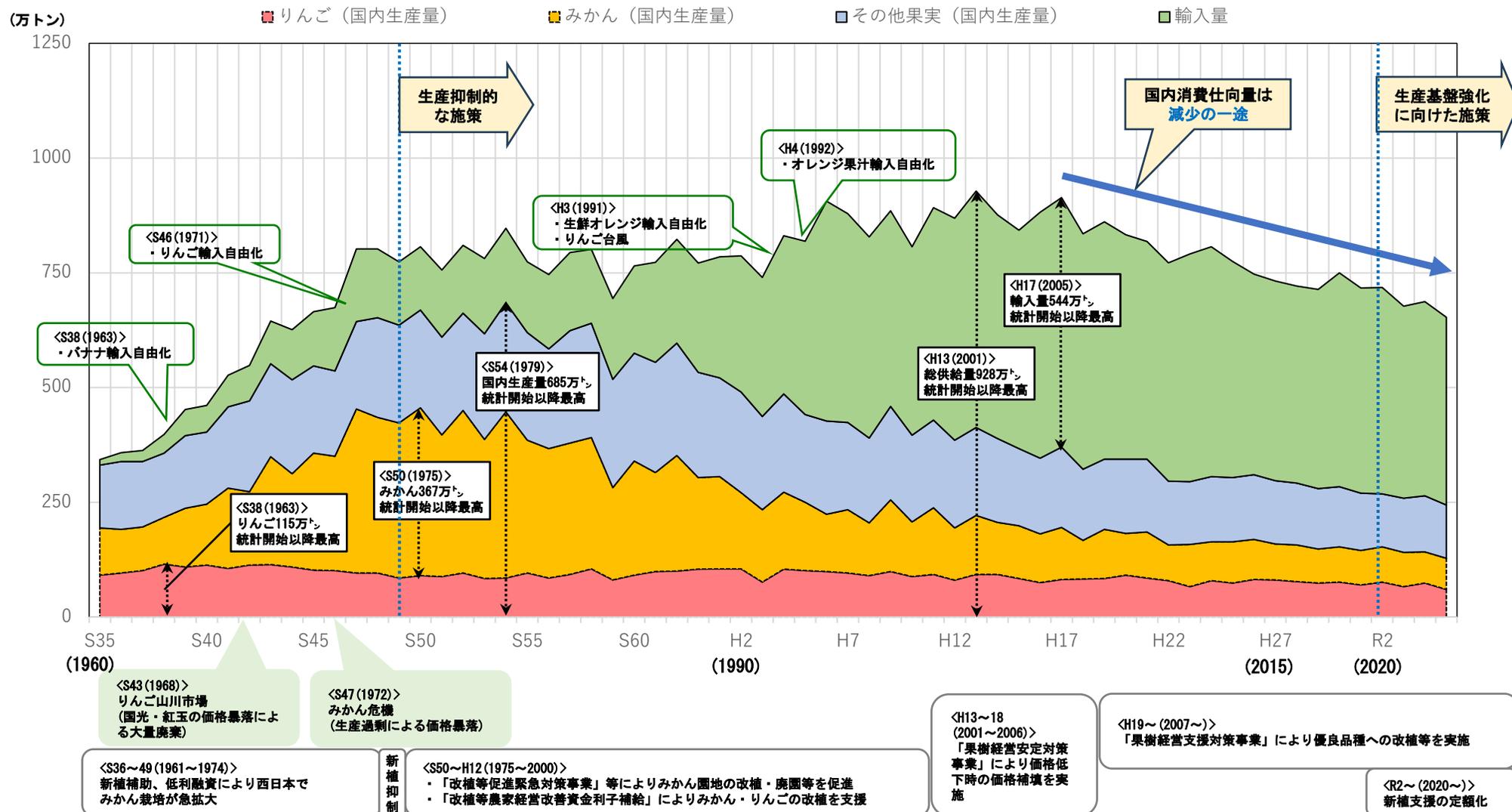


果実の需給構造（生産量と輸入量の長期推移）

- 果実の生産量は戦後大きく増加したが、りんごやみかんの生産過剰による価格暴落を受けて生産抑制的な施策が取り込まれ、昭和54年にピークに達した後、現在に至るまで減少。
- 令和2年に生産抑制から生産基盤強化に向けた施策に転換したものの、国内果実の供給量は減少し続けている。



<S43 (1968)>
りんご山川市場
(国光・紅玉の価格暴落による大量廃棄)

<S47 (1972)>
みかん危機
(生産過剰による価格暴落)

<S36~49 (1961~1974)>
新植補助、低利融資により西日本でみかん栽培が急拡大

新植抑制

<S50~H12 (1975~2000)>
・「改植等促進緊急対策事業」等によりみかん園地の改植・廃園等を促進
・「改植等農家経営改善資金利子補給」によりみかん・りんごの改植を支援

<H13~18 (2001~2006)>
「果樹経営安定対策事業」により価格低下時の価格補填を実施

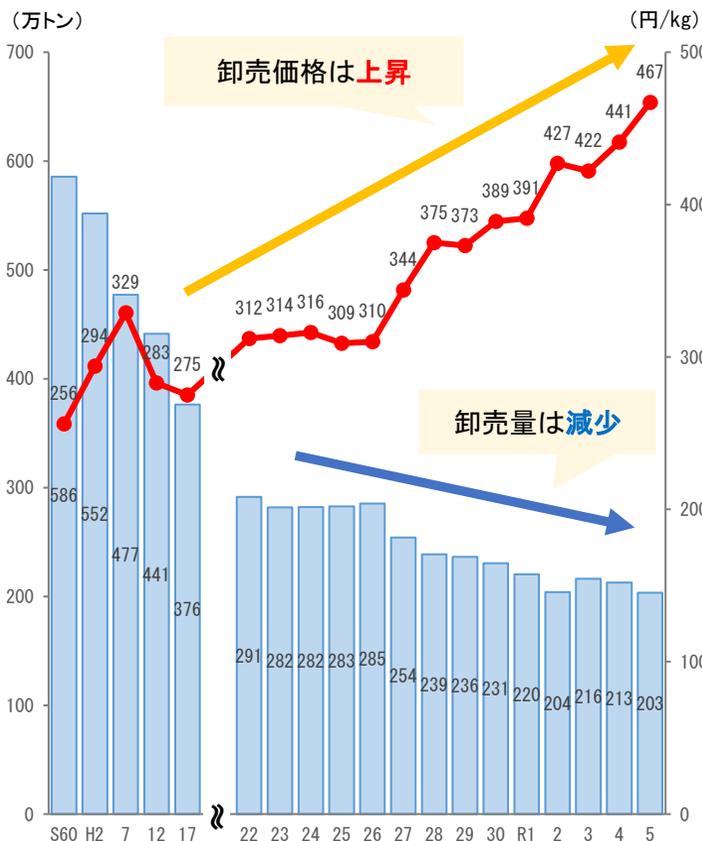
<H19~(2007~)>
「果樹経営支援対策事業」により優良品種への改植等を実施

<R2~(2020~)>
新植支援の定額化

果樹の生産（卸売価格の上昇と生産基盤のせい弱化）

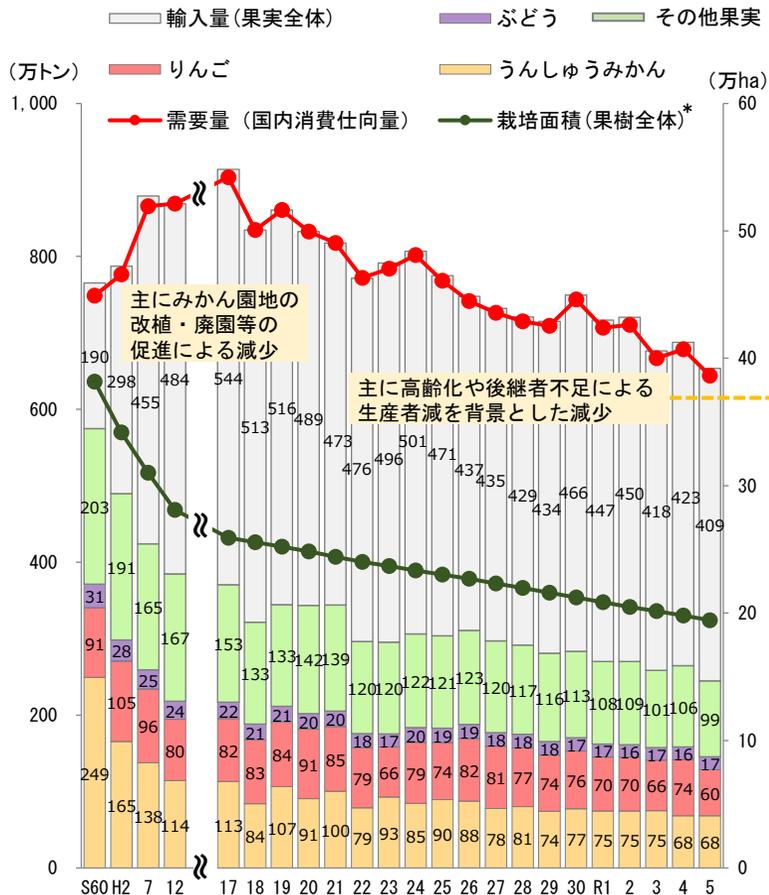
- 高品質な果実の生産や国内外での堅調な需要を背景に、国産果実の卸売価格は上昇傾向で推移。
- 一方で、果樹農業は高齢化や後継者不足を背景として生産基盤がせい弱化し、栽培面積、生産量ともに減少傾向にあり、需要に対し国内生産が応えきれていない状況。

国産果実の卸売価格と卸売量の推移



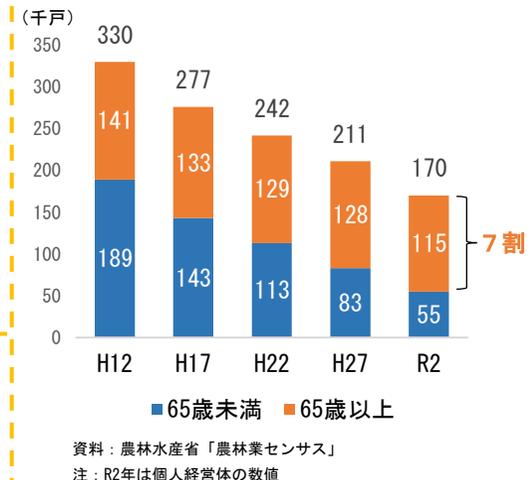
資料：農林水産省「青果物卸売市場調査報告」

果樹の輸入量・生産量・栽培面積の推移



資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「食料需給表」※令和5年度は概算値
*栽培面積（果樹全体）は耕地及び作付面積統計で把握している品目の栽培面積の計

果樹の農業経営者年齢別販売農家数の推移



資料：農林水産省「農業センサス」
注：R2年は個人経営体の数値

- 販売農家数は20年で半減し、65歳以上が7割、60歳以上が8割を占める状況
- 栽培面積は10年で36千ha減少（H25:23万ha、R5:19.4万ha）
- 生産量は10年で59万トン減少（H25:304万トン、R5:245万トン）

経営体の減少を踏まえた将来予測（試算）

- 全ての経営類型（法人等団体経営体、主業経営体、準主業・副業的経営体）で減少又は横ばい。
- 経営規模の拡大を考慮せず、2020年時点の1経営体あたりの経営面積を基にして試算すると、2030年の経営面積は5割弱の減少。

○ 経営体数（万経営体）

| | 2020年 | 2030年 (試算) |
|------------|-------|---------------|
| 法人等団体経営体 | 0.2 | 0.2 |
| 主業経営体 | 3.9 | 1.9 |
| 準主業・副業的経営体 | 8.8 | 4.3 |
| 合計 | 13 | 6.5 |

全ての経営体で
減少又は横ばい

○ 経営面積（万ha）

| | 2020年 | 2030年 (試算) |
|------------|-------|---------------|
| 法人等団体経営体 | 1.2 | 1.5 |
| 主業経営体 | 9.3 | 4.7 |
| 準主業・副業的経営体 | 10 | 4.9 |
| 合計 | 20 | 11 |

5割弱の減少

（参考）2030年の経営面積（試算）について

- ・ 2030年にかけて経営規模が拡大しないと仮定し、経営類型（法人等団体経営体、主業経営体、準主業・副業的経営体）別に「2030年の経営体数」に「2020年の1経営体当たり経営面積」を乗じて算出

気候変動への対応（高温等による被害）

- 地球温暖化が進行する中、高温等の影響でうんしゅうみかんやりんごの日焼け等の障害が発生。果樹は永年性作物であり、高温等の影響は当該年度のみならず、翌年度以降の長期に及ぶことを踏まえた対策が必要。
- 令和6年は夏の高温の影響により、みかん・りんご・かき等で日焼けが発生し、なしでは「みつ症」が発生。おうとうでは「双子果」や障害果（過熟果）の発生が増加。また、秋～冬にかけての高温により、みかんの浮き皮やうめの不完全花の発生が増加。

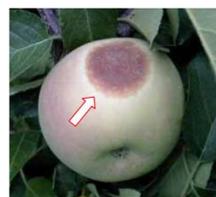
令和6年産の作柄及び高温等による被害（令和6年11月時点） ※卸売数量は、日園連調べ。平年は過去6か年平均

うんしゅうみかん



- 夏の高温により、果実の日焼けが発生。
- 秋季の高温・多雨により浮き皮が発生。
- 令和6年産卸売数量は、平年より3割減少。

りんご



- 夏の高温により、果実の日焼けが発生。
- 令和6年産卸売数量は、平年より1割減少。

なし



- 夏の高温・乾燥により、果肉の一部が水浸状となる「みつ症」が発生。
- 令和6年産卸売数量は平年並みであったものの、晩生品種を中心に品質が低下。

かき



- 夏の高温により、果実の日焼けが発生。
- 令和6年産卸売数量は、平年より1割減少。

うめ



- 開花前の冬季の高温により開花期が大幅に前進し、めしべの発達が不十分なうちに開花（不完全花）したため、着果数が減少。
- 令和6年産卸売数量は、平年より5割減少。

おうとう

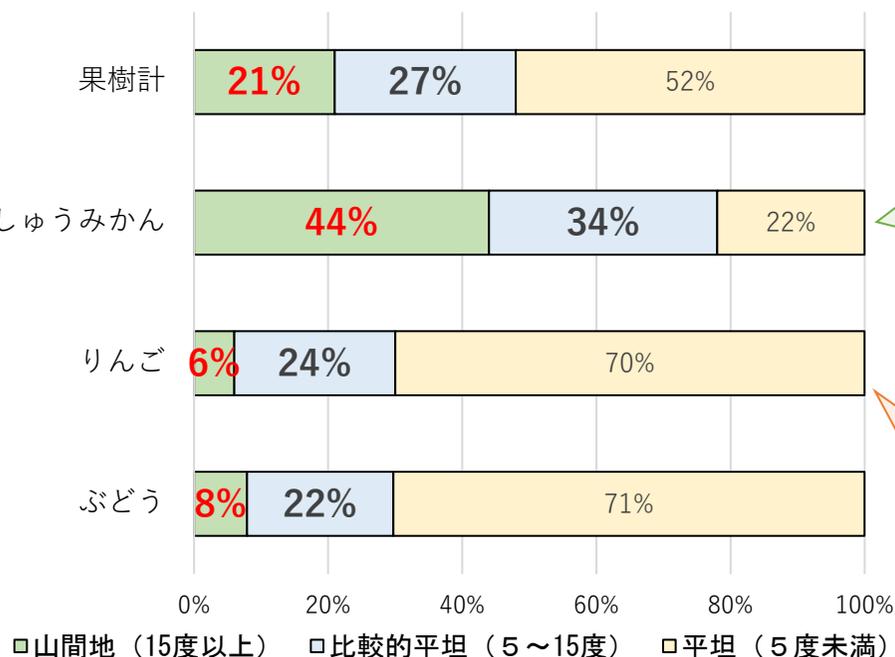


- 令和5年夏の高温の影響により、めしべが2つに分かれ、実が2つについた「双子果」の発生が増加。
- 収穫期の6月中旬の高温により、障害果（過熟果等）の発生が増加。
- 令和6年産卸売数量は、平年より5割減少。

果樹の生産（傾斜地での栽培）

- 果樹は山間地での栽培が多いことが特徴。品目ごとに樹園地の傾斜度別割合は異なり、例えばみかんは傾斜が急な樹園地が4割以上である一方、りんごは平坦な樹園地が7割と推計。
- 比較的平坦な立地であっても、果樹栽培は整枝・せん定等の高度な技術を要するため機械化が進まず、労力や時間のかかる手作業が中心で危険を伴う高所作業等も多い。不慣れた作業者では熟練の技術を要する作業に取り組むことが困難。

傾斜度別の樹園地の割合



資料：農林水産省果樹花き課調べ（平成14年度以降調査なし）

山間地の多い地域（樹園地の傾斜15度以上）



- 急傾斜の段々畑では軽トラック等で園地までたどり着けない。
- 作業中の危険性が高く機械化が困難。

平坦な地域（樹園地の傾斜5度未満）



- 枝が広がった高い樹形が整列せずに並ぶ。
- 1本ずつの樹を立体的に回る作業が必要となり動線が複雑。
- 複雑な動線に合わせての機械開発・導入はハードルが高い。